

小林昇青少年期・福島期文書

関西学院大学 原田哲史 2021年8月31日（改訂版）

目 録

— 松本旬子氏から文書を受け取った際（2021年3月）の目録を修正して作成。

— 年号は元号で記載し、西暦は省略（ただし小林自筆の場合はそのまま）。

文書番号	文 書 名	備 考
I ノート類（日記以外）		
1	My Record of Impressions	— 昭和6年6月～8月（見開きの記載による）。ただし、最末尾には「七・八・卅一」（7年8月31日）と記載。 — 日記風の短歌・随想。旅でのものが多い。
2	Random Thoughts 2	— 昭和7年9月～8年1月。 — タイトルは表紙カバーに「“Random Thoughts” 2」と書かれており、見開きには「“Random Thoughts” 題をこう変へて見た」と記載。 — 文書番号1と同様、日記風に短歌・随想。旅でのものが多い。
3	Note Book	— 昭和7～9、10年。 — 日記風の、旅の記録と短歌。 — 父（9年）・兄（10年）の死。
4	Note Book	— 昭和7年。 — 和辻哲郎・沢村専太郎の作品についての読書録、日本の歴史的建造物についての考

		察。
5	歌帳	— 昭和7～8年。 — ノートではなくハードカバーの日記帳に整然と筆記なので、上の2・3の清書か（昭和7年の42首と8年の293首とされるも、あとの方は雑然）。
6	Random Thoughts 3	— 昭和8年1月～8月。 — 奈良・信州の旅行記。
7	Randam Thoughts 4	— 昭和8年9月～9年8月。 — タイトルは表紙カバーに「R. T. 4」、見開きには「Random Thoughts」と記載。 — 父の死、講義、進路など。
8	車窓の北海道 習作歌帳第二	— 昭和9年10月。 — 文書番号5がひとつめなら、これが「第二」。 — 短歌による北海道の旅行記（紅葉の押花あり）。
9	歌帳	— 昭和11年～14年。 — 昭和11年の「朝明の灰」の頃から、『歴青』の「朝降る灰」に何首か。
10	一九三八年夏の記録	— 昭和13年。 — 長野の旅など。
11	Bookman Note Book	— 昭和14～15年、ただし後ろの「平和の新年」は昭和21年。
12	川べり 墓地の桜（覚書）	— 昭和17年。 — 『狼煙』のための創作ノート、ただし未発表。
13	春の鶉 杜鵑	— 昭和18年。 — 前者は『狼煙』（文書番号27）第13号

		(増田晃追悼号) での追悼文の下書き。
Ⅱ 日記		
14	昭和12年1月～12月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 20～21歳。 — 大学生時代の勉強。マルクス『資本論』第1巻、森鷗外などを読む。 — 「矢内原教授の問題」(12/24)に言及。
15	昭和13年1月～12月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 21～22歳。 — 「「人民戦線派」第二次検挙あり、大内教授の「公債とインフレーション」は受験不可能」(2/1)。
16	昭和14年1月～12月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 22～23歳。 — 大学卒業、就職(東京海上)。 — 『狼煙』のこと。
17	昭和15年1月～10月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 23歳(日記は10月まで)。 — 福島高等商業学校～(8/24)。 — 『狼煙』のこと。
18	昭和16年1月～12月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 24～25歳。 — 福島での生活、『商学論集』、勤労作業、防空演習など。
19	昭和17年1月～12月の日記 (昭和18年の1月6日のみ含む)	<ul style="list-style-type: none"> — 25～26歳。 — 「ハワイ海戦のニュース映画」(1/1)。 — 「植民政策の論文」を「草せり」(5/31)。
20	昭和18年1月～12月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 26～27歳。 — フリードリヒ・リストを読む。 — 増田晃 戦死。 — 縁談(3月)、挙式(11月)。
21	昭和19年1月～7月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 27歳(日記は7月まで)。 — フリードリヒ・リストに没頭(農業政策論、植民論)。

		<ul style="list-style-type: none"> — 勤労働員で松戸へ。 — 応召。
22	昭和 21 年 7 月～22 年 4 月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 29～30 歳。 — 帰還。 — 高商は「福島経済専門学校」に。 — 戦後の生活。
23	昭和 22 年 4 月～11 月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 30～31 歳。 — 論文集出版のことなど。
24	昭和 23 年 2 月～26 年 1 月の日記	<ul style="list-style-type: none"> — 31～34 歳。
Ⅲ その他		
25	福島高等商業学校教授任命書	<ul style="list-style-type: none"> — 昭和 16 年。 — 総理大臣近衛文麿が任命権者。
26	文学関係の諸文書	<ul style="list-style-type: none"> — a 手書き原稿「動いた人」。 — b 手書き原稿「鷗外の「空車」と遺書」。 — c 手書き原稿「源泉」。 — d 『東京 河上会会報』 no. 66、1993 年 11 月（「鷗外の『空車』と遺書」が所収）。 — e 抜刷り「森鷗外研究の新課題——鷗外文学と脚気対策問題」（『日本学士院紀要』第 58 巻第 2 号別冊、2003(平成 15)年発行）。
27	『狼煙』全 15 号製本	<ul style="list-style-type: none"> — 第 1 号、昭和 14 年 11 月。 — 第 2 号、昭和 15 年 1 月。 — 第 3 号、昭和 15 年 3 月。 — 第 4 号、昭和 15 年 5 月。 — 第 5 号、昭和 15 年 8 月。 — 第 6 号、昭和 16 年 3 月。 — 第 7 号、昭和 16 年 8 月。 — 第 8 号、昭和 16 年 11 月。

		<ul style="list-style-type: none">— 第9号、昭和17年3月。— 第10号、昭和17年9月。— 第11号、昭和17年12月。— 第12号、昭和18年5月。— 第13号 (増田晃追悼号)、昭和18年11月。— 第14号、昭和19年5月。— 第15号、昭和19年11月。
--	--	--

この文書集成から分かる初期小林昇

目次

- a. 青少年期と福島期とりわけ後者の意味について
 - b. 文学と増田晃への傾倒
 - c. 大学生時代の勉学
 - d. 福島時代の交友関係
- むすび——文書集成のいきさつと謝辞

a. 青少年期と福島期とりわけ後者の意味について

1916(大正5)年11月1日に生まれ2010(平成22)年6月3日¹に没したわが国の傑出した経済学史研究者小林昇(日本学士院会員、福島大学・立教大学の名誉教授)の、青少年期と福島期におけるノート類・日記・その他の集成が、この小ぶりのコレクション「小林昇青少年期・福島期文書」である。

青少年期というのは、14～16歳の彼のノート“*My Record of Impressions*”(文書番号1)や“*Random Thoughts 2*”(文書番号2)さえ含まれているからである。前者は、1931(昭和6)年の奈良旅行の記録から、しかも6月13日の法隆寺についての短歌「大和路の白く続けるその末に／薨そびゆる斑鳩の寺」でもって始まっている。8月19日には「希臘羅馬神話」を読む。西洋の文化を理解するに最も必要な本に、今やっと触れることを得た」と言っているように、彼がすでにこの頃から日本と西洋の古代に対して関心をもっていたことが分かる。1932(昭和7)年～33(昭和8)年に短歌の歌集の1冊め(文書番号5)を作成したのち、1934(昭和9)年には2冊めの歌帳(文書番号8)を北海道旅行の記録としてまとめている。武蔵高校の卒業が1936(昭和11)年であることからして、小林の精神的・知的な早熟ぶりに驚嘆させられる。

福島期というのは、彼が福島大学経済学部(戦前は福島高等商業学校)に在職した1940(昭和15)年から1955(昭和30)年の通算15年間のうち、赴任時から1949(昭和24)年初

¹ 小林昇の生涯についてのデータはおもに服部正治・竹本洋編『回想 小林昇』日本経済評論社、2011年、p. 381-383の「小林昇年譜」によったが、微細な点については松本旬子氏に確認した。

め頃までの重要な7～8年間（1944(昭和19)年～46年(昭和21)年の兵営期を除く）をカバーする複数の日記（文書番号14～24）が入っているからである。

小林にとって福島期全体が重要な時期であったことは、彼が晩年の自叙伝『山までの街』（2002年）で「学問をやや自由にまた個性的に、育んでなにほどこか成長させはじめたのは、往時の福島時代においてだった」²述べているように明らかであるが、なかでも、兵役の前と後のそれぞれ3～4年は、保護貿易の産業主義者フリードリヒ・リスト（1789～1846年）についての彼の研究にとって、決定的な意味がある。

小林の福島高商での担当講座は「植民政策」であったが、経済学史への強い関心からとりわけリストを深く読み進めていた彼は、当初、日本の東南アジアや満州への植民的進出を肯定して、それとリストの拡張主義・植民地主義とを親和性のあるものとして並べていた³。ところが兵役で辛酸をなめ・侵略の不条理を痛感してヴェトナムから福島に復帰したのちの彼は、その後のリスト論の原型となる1948年の『フリードリヒ・リストの生産力論』を書いて以降、リストを農民の政治参加を提唱した民主主義者でありながらも拡張主義に向かう悲劇的な思想家として描いていく⁴。リストは保護貿易による産業化を目指した経済思想家でありかつ拡張主義を有していたと把握する小林の指摘は、厳密なリスト読解に基づく彼の一貫した主張であったが、小林の観る視座が兵役の前後でそのように転換していったことの意味は大きい。それでもって、後発国が産業化するとともに民主主義にもかかわらず侵略性を帯びていく危険性というものが指摘・警告されうるからである。兵役期をまたいだ複数の日記を含む本コレクションは、彼のこうした内面的変化のプロセスを探るための一級の資料である。

b. 文学と増田晃への傾倒

兵役前の小林は帝国日本の植民地進出をそのように肯定しているのであるが、とはいえ、根っからの軍国青年ではなかったことは、この時期の小林が文学青年でもあったことから分かる。

本コレクション所収の同人文芸雑誌『狼煙』（第1巻(1939年)～第15巻(1944年)）（文

² 小林『山までの街』八朔社、2002年、p. 197。

³ 小林昇「広域経済圏の成立と植民学——植民現象の本質に関する一般理論の素描」、『国際経済研究』第3巻第6号、参照。

⁴ 原田哲史『19世紀前半のドイツ経済思想——ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト』ミネルヴァ書房、2020年、p. 251-258 参照。

書番号27)は、彼が文芸活動に入れ込んだ証である。福島高商に勤める前、小林は「この雑誌にずいぶん肩入れをして、[…] そのために憔悴して、短期間ながら心臓神経症を患ったこともある」⁵ほどであった。小林はその15の号すべてに短歌・小説・論説などを寄稿しているから⁶、1940年に福島に来てからもそれへの関与は続いていたのである。その中心人物 増田晃 (1915(大正4)~1943(昭和18)年)とのやり取りが何度も日記に記されていることは、それへの関心の強さを示している。福島赴任後の1941(昭和16)年2月1日、小林は日記(文書番号18)に、増田が詩集『白鳥』(1941年3月)の出版前に「校正刷一部をわれに示す。／少し酒を汲む。果てて後、さきに増田がわれに送れる戯詩を筆にて書かしむ」と記しており、若くして詩集を出す増田が小林に心を許し、小林もそれを楽しむ様子が窺える。

注意すべきことは、小林が文学青年であったことのみを理由に彼が軍国青年ではなかったと単純に言いきれないわけでもないことである。彼がシンパシーを寄せた増田晃には、日本の古代に思いを馳せる国粹主義的な傾向があった。『狼煙』第6号(1941(昭和16)年3月)・第7号(1941(昭和16)年8月)・第8号(1941(昭和16)年11月)のそれぞれ巻末には「編輯兼発行人」の増田晃の上記の『白鳥』の広告があり、「戦ひによって展けた新しい時代は政治に先立つて詩に顕現した。[…] 飛鳥天平の光栄の日を讃仰することによって民族の伝統を世界詩の伝統に投じ」るのがこの詩集である、とされている。また『狼煙』第13号(1943(昭和18)年11月)では、その巻頭の増田の自筆文章(写真版)に「今ぞはじめて高光る神日本盤余尊」とあり、『古事記』『日本書紀』で初代天皇とされた——軍国日本でその即位から紀元2400年と称揚され・軍事的な鼓舞に使われた——神武天皇の威光の顕現というものが叫ばれている。文学の領域とはいえ軍国主義に通ずる要素はそこにあったのである。同誌のこうした性格こそ、文芸雑誌でありながらも戦時下に敗戦の前年まで刊行が許された所以であろう。

ただし、もうひとにねり考える必要がある。では小林が増田にシンパシーを寄せていた際、彼が増田のそうした傾向をどう捉えたうえでのことか、という問題である。小林は、その第13号に「春の鶉——増田晃のこと」を寄稿しており、増田の「古代頌の意味について」は「古代は薫香を放つ肉体をあらはにしつつ復活し顕現してゐる生命なのであつ

⁵ 小林昇『山までの街』p.9。

⁶ 刊行は、年によって何号刊行するか決まったものではなくまちまちであるが、1940(昭和15)年には最も多く第2号から第5号の4冊が出されている。

て、詩人〔増田〕自身の地盤はゲエテのやうに健康なのである」⁷と述べている。ここからすれば、「古代」が神武天皇の世界か古代ギリシャの神話世界（ゲーテの賞揚したそれ）かは文化圏の相違によるヴァリエーションでしかなく、最も重要なのは「薫香を放つ肉体」をもつ「生命」の躍動感のある世界ということになる。そうだとすると、古代賛美者増田への小林の共感は、紀元 2400 年キャンペーンをテコとした軍国日本による侵略戦争の推進に直接的に寄与しようとしたわけではないことになる。

少しさかのぼると『狼煙』第 7 号（1941(昭和 16)年 8 月）で小林昇は「白鳥の意味——戦争の時代の精神史」を發表しており、そこでは、詩人増田における「飛鳥」は「没我であり、〔…〕聖徳太子に具現された犠牲の精神であり、根本に置いてエロスである。〔…〕愛は犠牲にのみ存した」⁸としている。「詩人の祈願」であった「飛鳥の精神」は「愛によって悲慘を超えること」なのであり、これこそ「まさに現代の要求」⁹なのである、と小林は言う。つまり、小林が共感する増田の飛鳥像は、エロスのな「愛」に基づいて「犠牲」を厭わない善意の人々による共同体なのである。それに対して「善意の民族にとって嘗てない悲劇である今日の戦ひ」がなされていると言っており、小林は、飛鳥の共同体的理想と「今日の戦ひ」とが一致するわけではないと示唆している可能性がある。

そうだとすると、小林の文学的見地は、福島時代初期での彼の経済学での日本の植民地進出・植民地支配の肯定とどのような関係にあるのか。後者は、たまたま「植民政策」を担当することになった彼が、やむをえずとった立場なのか。いずれにせよ、当時の小林の文学的志向それ自体について、またそれと彼の学問上の見地との関係については未解明な部分が多く、本コレクションおよび周辺を使って明らかにされることが望まれる。

なお、小林の文学志向は彼の若い日々にとどまるものではない。

上に挙げた『狼煙』第 13 号は、じつは同年中国で戦死した増田の追悼号なのであり、小林の「春の鶉——増田昇のこと」は追悼文である。そこで小林は、「増田の詩業」は「ひろく認められてゐるとは云い難い」から「彼の遺稿と全作品とが編纂されれば」、「さういう日のためにいささかの用意をして置きたい」¹⁰とも言っているし、筆者は、小林昇

⁷ 小林昇「春の鶉——増田昇のこと」、『狼煙』第 13 号（1943(昭和 18)年 11 月）、p. 19。

⁸ 小林昇「白鳥の意味——戦争の時代の精神史」、『狼煙』第 7 号（1941(昭和 16)年 8 月）、p. 16。

⁹ 小林「白鳥の意味」p. 15-16。

¹⁰ 小林「春の鶉」p. 28。

の長女松本旬子氏（旧姓小林）から、小林昇が晩年においてさえ増田晃の作品を編纂したく思っていたと聞いている。小林はその志を終生もち続けていたのである。

小林の文学への関心は青年期にもたれていたが、彼はその後『越南悲歌』（1953年、私家版）、『シュワーベンの休暇』（1966年）、『百敗』（1991年）、それまでの短歌をまとめた『歴世——小林昇全歌集』（2006年）といった歌集を、また森鷗外についての論文（文書番号26その他）をも出しているのである。文学への絶え間ないアプローチが経済学史研究と一定の距離を置きつつも終生なされていた。ただし、経済学史の探究が生活の大半を占めるなかで2つの領域はしばしばその接点を現しもする。『シュワーベンの休暇』では、リスト研究者の小林に親しみをもって接したE.ザリー（1892～1974年）や逆に批判的であったA.ゾマー（1889～1965年）というふたりの『リスト全集』（1927～35年）編集者について歌われている¹¹。最晩年の小林昇は、「直観的理論」の提唱による、広汎な文化諸領域を包括・統合する経済科学の建設¹²を企図したそのザリーが詩人シュテファン・ゲオルゲ（1868～1933年）に心酔していた事実気付、ザリーのもとでかつて助手を勤めてそれを継承しているフランクフルト大学教授の経済学史研究者でありゲオルゲ協会会長も務めたB. シェフォールトを、自宅で病気後の静養中にもかかわらず嬉々として歓待している¹³。

小林昇のそうした終生変わらぬ文学への強い関心を鑑みると、彼の『経済学史著作集』（全11巻、1976～89年）のタイトルに「経済学史」が入っているのは「文学」著作集を別に出す可能性が含意されているかとさえ思わせるほどである。小林の文学に関する初発の問題意識を探るうえで、本コレクションは貴重な資料を含んでいる。上記の古代憧憬や増田晃との関連はもちろんのこと、その他、日記（文書番号24）には昭和25年の12月31日にシュテファン・ゲオルゲを読んだことが記されており、最晩年の出来事でさえそのベースが福島時代に培われていたことが分かる。

c. 大学生時代の勉学

ふたたび小林昇の学問形成に戻ろう。もう少しさかのぼって学生時代の小林が何を学

¹¹ 小林昇『シュワーベンの休暇』未来社、1966年、p. 76-77 参照。小林のザリーとゾマーそれぞれに対する関係については、原田『19世紀前半のドイツ経済思想』p. 213, 281-282（注83）参照。

¹² 小林昇「東西リスト論争」新考、『日本学士院紀要』第61巻第2号、2007年、p. 97 参照。

¹³ 小林昇「東西リスト論争」新考、p. 95-97 参照。

び・吸収したかが、本コレクションから分かる。東京大学経済学部在学期（1936(昭和11)～39(昭和14年)）の1937（昭和12）年の日記（文書番号14）を読めば、彼の猛烈な勉強ぶりが浮かび上がる。

3月24～25日に小林はフォイエルバッハ『ヘーゲル哲学の批判』（岩波文庫）を読んで30ページ分もの読書録を書いており、そこで「マルクス・エンゲルスは、ヘーゲルを継承したといふよりはむしろ復興したのだ」と言っている。また4月27～28日にはフォイエルバッハ『将来の哲学の根本問題』について22ページ分、4月30日にはエンゲルス『フォイエルバッハ論』について3ページ分の読書録がある。このように、彼はドイツ思想のヘーゲルからマルクス主義へと至る系列に強い関心をもっていた。それに対して、その間の4月22日にはナチス政権下のドイツで出たK.タールハイム『現代経済の成立と本質』（1934年）を原書で読み、「現代に関する短い部分は勿論ナチス的立場から書かれたもの」としており、ドイツ的な知性におけるドイツ観念論哲学・マルクスの系列とナチズムとの違いが意識されている。

5月7日にはマルクス『ドイッチェ・イデオロギー』（おそらくリヤザノフ編・三木清訳、1930年）、5月19日にはマルクス『哲学の貧困』についてそれぞれ数ページの見書録がある。またヘーゲルについては7月30日にその『歴史哲学』について10ページほどの見書録、9月7日にはマルクスの「資本論第1巻について覚書」が8ページ、11月7日にはレーニン『唯物論と経験批判論』についての4ページの見書録がある。

その間8月19日ヘクシャー『重商主義』（ドイツ語版）を読んで「八冊のノートが出来た」としているし、12月21日には「重商主義保護政策の理念——その物的側面について」と題した「六百字詰の原稿用紙に丁度百枚」のレポートをヘクシャー「を中心としてゾンバルト、リスト、ウェーバー、マルクス、その他の邦訳等をも参考にしてまとめた」とある。以上から、学生小林がヘーゲル、マルクス、レーニンに至るマルクス主義の経済学に強い関心をいただきつつ経済学史・経済思想を精力的に学んでいたことが分かる。

そうした読書以外で学生生活・勉学に関する事柄としては、12月24日「矢内原教授の問題」に言及している。これについてここで詳しく書かれてはいないが、植民政策を論じていた東大経済学部教授の矢内原忠雄（1893～1961年）がまさにこの日記の書かれた1937年に戦争政策を批判して教授職を追われた事実は、後に福島で植民政策を講義する小林にとっては、自分にもその危険性がありうることで、脳裏を離れなかったに違いない。同じ日に小林は、「演習生T.T」がドイツ関税同盟の「背後にひそむドイツ精神な

るものを強調した」ことを本位田教授が「擁護した」のに対して、自分は「ドイツ精神の無規定的な点を非難した」としているが、上記の日記の記述から推測するに、「演習生 T.T」が「無規定的に」ナチス的なドイツ精神を賞揚したのに対してマルクス主義的なドイツ精神も考慮すべきはずだ、ということが小林の言外にあったのではないか。12月27日に「本位田教授が国策への助言にいよいよ乗り出す。私の態度を決定しなくてはならぬ」と記しているように、それらから指導教授本位田祥男（1892～1978年）を暗に批判する小林の姿勢が看取できる¹⁴。情勢との関連では、「行はれた南京陥落祝勝の進行に私は参列しなかつた。有沢助教授は参列したといふ」（12月24日の付記）と云う記述や、「日本の国家主義者の「心情」には依然反感をもつ」との言（12月31日）がある。

その他、文学との関連で言えば、まだこの頃は『狼煙』（1939年から）の刊行も始まっておらず増田晃についての言及も日記で見られないものの、7月28日には森鷗外（1862～1922年）について「鷗外の『独逸日記』をこのころ楽しみながら読む。[…]彼のローマン精神を感じないわけにはいかない」とあり、小林の晩年にまで至る鷗外への関心（文書番号26参照）がすでに始まっていることが分かる。ただしここでの「ローマン精神」とは社会経済思想でのロマン主義のことではなく、「彼が交際した多くの婦人のことをたんねんにしるしてあること」などからくる「典雅な文章」のことを指している。

d. 福島時代の交友関係

福島時代の小林の日記から看取される興味深い事実としては、当時の彼の交友関係がある。例えば、当時の福島大学での同僚で、のちに大阪大学教授となり厚生経済学・経済政策の領域で日本の主導的な近代経済学者となった熊谷尚夫（1914(大正3)年～1996(平成8)年）とのやり取りが、日記にしばしば見られる。1941(昭和16)年の日記（資料番号18）では、1月9日での「午後に熊谷来り、ともに登校す」のみならず、2月2日には「熊谷その女美和子を連れて約束しありたるコーヒーを受け取りに来る」とある。また翌年の日記（資料番号19）の1月27日には「母、熊谷方にコメを受け取りにゆく」とも書かれている。このように、熊谷との交友は私生活にまで及んでいた。当時わが国の経済学史研究者の多数がマルクス経済学の観点からそれに取り組んでいたのに対して、小林が「私はマルクス経済学で経済学の基礎を学びましたが、経済学としては、それに限定せずに近代経

¹⁴ 小林『山までの街』p.3では、本位田について「この人の専門の学殖は尊敬に値するものではなかつた」とされている。

済学も含めて捉える必要があります」¹⁵といった見地をとっていたことは、福島時代からの熊谷との知的交流がベースにあった、と考えて間違いないであろう¹⁶。

むすび——文書集成のいきさつと謝辞

本集成は、2021年3月に小林昇の長女松本旬子氏（旧姓小林）が自らの手にあった小林昇の青少年期・福島期に関する諸文書を、まとまった形で図書館・研究機関に寄贈すべく、筆者にその仲介役を依頼されて、お渡しくださったものである。信頼とともに筆者にその役割を委ねられた松本氏に、深い謝意を表したい。また、寄贈のためのこうした目録・文書をまとめるにあたり貴重なご教示・ご助力をくださった——松本旬子氏はもちろんのこと——大塚雄太氏（愛知学院大学教授）、竹本洋氏（関西学院大学名誉教授）、服部正治氏（立教大学名誉教授）、渡辺邦博氏（奈良学園大学名誉教授）（五十音順）にも心からお礼申し上げる。

¹⁵ 筆者が1970年代後半に福島大学経済学部で学んだとき、立教大学にすでに属していた小林昇が集中講義で福島大学で「古典経済学史」を講じた際、講義後に設けられた学生との質疑応答の会で、ゼミの同級生G君の質問に対して小林が述べた内容。筆者がこの小林の言をいまでも明瞭に思い出せるのは、その講義で「優」をもらったにちがいないG君に対して、筆者の成績評価が「良」であった苦い経験とも関連するであろう。

¹⁶ 「生涯の友人」熊谷尚夫について小林『山までの街』p.16-20参照。そこで小林は熊谷が「セクシュアルな話題を好んで選ぶ」（同p.18）と言っているが、日記での「その女美和子」がそれと関連するかどうかは分からない。「美和子」がどういう人物かは不明であるが、不倫相手のようなものではないだろうことは、「そんな人が来るようなことは祖母が許しません」との松本旬子氏の発言からしてありえないだろう。コーヒー好きの職員か。